

野戦砲兵学校での1年3か月

福田貞一 鹿沼市

●砲兵学校に入る

あの頃は航空兵とか通信兵とか、陸軍省で募集していて、千葉県の四街道にあった陸軍野戦砲兵学校（注1）に志願しました。今だから言えるけど、砲兵なら、実際に戦争に行っても戦闘の一番後方にいるのだから、命は安全だろうと思ったからです。徴兵となれば、自分の希望を言うことなどは決してできませんからね。

選抜試験会場は宇都宮の県立商業学校でした。

ほかの学校の受験者も一緒に、野戦砲兵学校の希望者が何人いたかはわからなかったけど、実際に入校できたのはその会場からは自分一人でした。

次に二次試験があるから仮入校で出頭するように、という命令がきて、学校で3日間試験をやり、実際に採用されたのは全国で175名。上官がお前たちは何千人の中から選ばれた連中だ、なんて言っていたが、なかなかの難関でした。昭和19年6月に入学、17歳でした。

●学校での訓練の日々

朝は5時、冬は6時に起きて点呼。その前に裸になって乾布摩擦をするが、冬は辛かった。よいしょ、よいしょ、とやるんだけど、みんなやけくそになって、ちくしょう、ちくしょう、って体をこすったんだ。

生徒隊は四区隊に分かれ、第一、二区隊は観測、

第三区隊35名は写真・音源、第四区隊は自走砲のそれぞれ専門の教育で、私は第三区隊でした。

鉄砲で撃つのと違って、大砲でドカーンとやるわけだから、遠くにある目標は砲台鏡というメガネでなければ見えないです。照準を見て撃つわけだが、でかい大砲になると、目標を見つけて方向を決めるのに手では動かせないの、結局機械を操作するんです。

撃つ目標を見つけないのは、敵も隠れているし、ごまかすから難しいが、それを見つけないために飛行学校の偵察機が観測写真を撮る。勇敢にも敵地を低く回って撮ってくるわけだ。その航空写真を見て、どのくらい距離があるか、陣地の様子がどういふものかを知ることが習いました。その教育というのとはなかなか難しかったです。

平面の写真でもある程度わかるが、実体鏡というのがあれば高低もわかる。その実体鏡を使わないで自分の目で、高い、低いを判断するという教育も受けた。あの頃は平面写真を見ても、ここに川がある、道があるとか、その他の細かいことの判別も付けることができた。

弾が通らないように頑丈に作ってある、自走砲という戦車、装甲車は、中に人が入って小銃、機関銃を撃つんですが、その教育も受けました。戦争の、殺し合いの教育です。

学校では、ほかに数学、国語、地理、歴史、などの勉強もするし、軍隊においての内務令とか懲罰令とかの勉強もしました。体操教範なんてい

う学科があつて、どういう体操をすればいいかというようなこともやった。少しだったが、乗馬の訓練や銃剣道もやったし、一通り、なんでも訓練しました。

食事は食べ盛りにもかかわらず、量は少なかつた。腹が減っても、もう少し欲しい、なんて言えなかつた。自分たち三期生の場合は休暇がなかつたけれど、先輩たちは故郷に帰ると、痩せた、痩せたつて、家の者みんなに泣かれたという話をしていました。

内務班というのは、要するに軍隊のような共同生活の訓練の場です。日曜日は休みで、洗濯、繕いものをする日でした。たまに相撲をとったりもしました。

●欠けた友人のこと

ある友人が風邪を引いたんです。頑張れ、と班長にどやしつけられたけど、本当にひどかつたようで、ついに病院に入院した。しかし、やはり仲間が恋しいのか、あるとき、みんなのところがい、とバジャマ姿のまま抜け出てきた。でもじきにわかつてしまつて病院に戻され、それからまもなく亡くなつてしまつた。痩せてひどい姿だつた。

もう一人、はしっこいやつだつた。兵器庫に入つてベルトを盗んだらしく、それが見つかつて営倉に入れられたんだ。ベルトは兵器の一つなので罪が重いんだそうで、生徒の身分を剥奪され、故郷に帰されました。

●体力と根性の徒步行軍

時々、行軍というのがありました。体を鍛えるために、1日に20^キも30^キも歩いた。体力だけでなく、根性も鍛える目的だったんです。

その頃は、20歳前のまだ兵隊に行かない人でも、そういう行軍の訓練はしていたものです。小学校、中学校を卒業した人が任意に入る学校で青年学校というのがあって、そこから来た人が脚を鍛えるために指導しました。小学校に鉄砲なんかも預けられてあったから、撃ち方の練習をしたり、そういう体を鍛えたりなどは日常的にやっていた。青年学校時代に、宇都宮の清原に陸軍の飛行学校があったから、鹿沼からそこまで、見学がてら往復歩いて行ったこともあります。現在はずっかり町になってしまつて、飛行場なんてどこにあつたかわからないが。

野戦砲兵学校に入ってから行軍は、なかなかだった。千葉から静岡県の北富士の演習場、河口湖周辺まで歩きました。時速5^キで、休みなくずっと歩き通しです。いくら頑張つても程度を越せば倒れてしまう。あの時は**いぶん**落伍者が出た。当時はそういうことが当たり前でした。なんでも戦争に勝つため、勝つために頑張れ、ということ、個人の感情は抑えられていた。不満があつてもそれを表に出さず、ガマン、ガマンの時代だったんです。

●はじめのビンタ

どこの軍隊でもそうだけど、1日でも早く入った人が先輩になるとか、上官の命令はどんなことでも断ることができないほど、上下関係は厳しいものでした。

敬礼には思い出があります。上官を見たらすぐ敬礼しろ、ということになってるから、うっかり敬礼しないと、欠礼したという理由でぶつ飛ばされる。私が学校に入ってからいちばん初めにビンタをもらったのは、この欠礼でした。

「飯上げ」といつて食事を取りに行く係の時のことだった。でかいアルミでできた食缶にご飯やお汁を入れて班に持ち帰る係です。二期生の当番が「進め、止まれ」、「食缶受領」、「食缶返納」と号令をかけ、それに従っていくわけです。学校に入ったばかりで、なんにもわからず、言われた通りにやればいいんだ、と思つていました。

あるとき、炊事当番がもたもたしていて、食缶をすぐに受け取れない時があつたんです。待つあいだに休憩する、と二期生が「休め」と言ったら、そのとおりに休んでいた。そこへ自転車ですーっと軍曹が通りかかったのです。二期生は「上官、敬礼」とやった。その後で「三期生、並べ」と言われました。「お前ら、どこ見てたんだ、先輩が気がついたのにお前らは気づかないなんて、意気地がない！」というわけでビンタを頂戴したのでした。

汚れたシャツを着ていたり、破けていたりしても、内務検査で叩かれることになります。

だから学校で楽しいことは、上官がいない時。軍曹、班長が常についているが、その班長は下士官だから週番勤務として衛兵につかなくちゃならない時がある。だから班長が留守の時、そういうときはみんな喜んだね。

●空襲の体験

千葉にいたので、3月9日、頭上をB29の編隊が銚子沖から低空で百数十機も襲来、学校の真上を通過していったのを見ていた。東京は一夜のうちに焦土と化し(注2)、その炎は四街道の空も赤く染めるほどでした。別の日、千葉の街が焼かれるのも見たし、宇都宮が焼かれた時には、不寝番の役目で夜中立っていたから、そのとき聴いていたラジオで、宇都宮がやられたというのはわかりました。

自分も何度か空襲にあいました。空襲の時は、防空壕に入つて逃げることしかできない。たいていは前もつて警報が鳴つて避難できたから、それほどではなかったが、ひどい空襲を2回ぐらい経験しました。一度、B38のでかいのが来た時、退避が間に合わずに松林に逃げたんです。長い大きい弾がぶすぶすと、近くの松の木に刺さつて、本当に震えてしまった。原っぱに演習に出ているときなんか警報が鳴つたこともあるが、さつさとしないと戦闘機のスピードが早いので、あつという間にやってきてしまう。そういう時はただ青くなつて、木の陰にしがみついているしかないんです。

とにかく、アメリカの撃ち方はすごいんだから。外地なんかで実際に戦闘をやっていたところでは、凄いな弾の数だったと思う。助かりっこないですよ。

●終戦で鹿沼に復員

生徒隊は1年半で卒業して、次に普通の連隊に配属されることになっていたが、自分たち三期生と四期生は学校にいたまま終戦になりました。復員命令が出て、みなそれぞれの故郷に戻りました。昭和20年8月30日に鹿沼に帰ってきました。

戦争に行くことはなかったけれど、学校には1年3か月いたことになりました。この砲兵学校自体も4年間だけの学校でした。

帰っても、食べていくのに働き口がない時代でした。農家の長男だったから、以来、ずっと農業をやって暮らしてきました。

●文集「平和よ、永遠に―少年砲兵史」

この文集は昭和50年頃から戦友が集まって、思い出にと作ったものです。

終戦の半年前に二期生が11か月しか教育を受けていないのに、フィリピンが危ないというので、繰り上げ卒業で出兵しました。そして船で九州を出た途端、爆撃にあい、70名の半分くらいは亡くなるという出来事があった。二期生まではフィリピンやビルマ、満洲などの激戦地に送られていました。

今考えると馬鹿げたことだけど、敵の戦車が来たら、持っている爆弾を戦車に投げて伏せろ、な

んていう戦争の仕方の教育を受けていた。戦車を壊すほどの威力があったら、助かりっこないですよ。そんな教育をまともに受けていた。先輩たちは大変な戦いを強いられ、亡くなった者も多い。あの厳しい青春時代を生き抜いたものが「平和よ、永遠に」と願うのも当然でしょう。

ちなみにこの文集に寄せられた文のタイトルだけをいくつか拾ってみる。「戦場」再びは行くまじ」「悲惨・これが戦争だ」「泥水すすり草を咬み」「これは小説ではない」「人道』は何処に」「私は戦場で地獄を見た」「孫たちよ、戦場に行くな」「その死を平和の礎に」；等々。

現在の若者は押さえつけられることもなく、自由でいいなと思います。このいい時代が長く続くことを祈るばかりです。

〈二〇一六年1月8日、お話を伺ってまとめました〉

注1…陸軍野戦砲兵学校

旧日本陸軍の教育機関の一つ。大東亜戦争突入後、少年生徒隊が設置された。満14歳以上18歳未満の少年に対し、砲兵情報連隊の観測掛下士官を養成する目的で、観測、特に測地、標定、写真等の学科、術科を教育し、卒業後は各部隊に配属する制度であった。

注2…東京大空襲

第二次世界大戦末期にアメリカ軍により行われた、東京に対する焼夷弾を用いた大規模な戦略爆撃の総称。日本各地に対する日本本土空襲、アメリカ軍による広島・長崎に対する原爆投下、沖縄戦と並んで、都市部を標的とした無差別爆撃によって民間人に大きな被害を与えた。空襲としては史上最大規模の大量虐殺とされる。東京は一九四四年（昭和19年）11月以降に106回もの空襲を受けたが、

その中でも「東京大空襲」と言った場合、死者数が10万人以上と著しく多い一九四五年3月10日の空襲（下町空襲）を指すことが多い。この空襲だけでも罹災者は100万人を超えた。（ウィキペディアより引用）



測遠機による測距訓練中（富士演習場で）
「少年砲兵史」より